

編 集 後 記

アジア連帯委員会
事務局長 山崎 高明

世界遺産の古都ルアンパバンの景観、笑顔で挨拶をしてくれる人々、仏教国を象徴する厳かな雰囲気など、ラオスという国が大好きになりました。

2023年ワーキング・スタディ・ツアーはコロナ禍を乗り越えて3年ぶりに実施することができました。団を盛り上げてくれたチーム・ピアラオ（2023年視察団の通称）のメンバーをはじめ、ご派遣いただいた組織と会員の皆様、そして、私たちが快く向かい入れ接していただいたコーディネーターのフンペンさん、ヌーソンさんら現地の方々に、この場をお借りして心から感謝を申し上げます。



私自身は前職の産別に入局して間もない1996年、CSAの前身であるCSIRA第15次訪タイチーム（当時はラオス入国はせず）に参加した経験はあるものの、事務局長として団を率いることは初めてでほどよい緊張感と期待を胸に準備を進めました。タイ、カンボジア、ベトナム、中国などラオスを取り囲む国への渡航はあるものの、ラオスは初渡航でしたので、多少は役に立つかとYouTube『8分で出来るラオス語の挨拶』を通勤途中に聴き流したりもしました。「サバイディー」「コプチャイライライ」帰国した今では得意気に使っています（笑）。

さて、私からは、期間を通じて印象深かったことを2つ紹介いたします。1つは、ラオス大使館公使による、SDGs 17目標の他に独自で18番目の目標に『不発弾の撤去』を掲げているという話です。おりしも前日に、地雷博物館見学をしたこともあり大いに共感を得ました。ベトナム戦争で最も激しい空爆を受けたのはラオスであり、戦争から40年以上経過した今でも不発弾による被害は依然として多く、その半分以上は子供たちだそうです。安全な地域で安心して教育を受けられる体制づくりが政府に求められるのと同時に、CSAとしても教育支援を継続してこうえで課題視すべきことではないでしょうか。

もう1つは、現地からのCSAに対する評価が予想をはるかに超えて高いということです。「CSAの支援のおかげで…」という感謝の言葉を訪問時に幾度となく耳にしました。これからも、物資面と教育面についてはできる限り応えていきたいと思いますが、一方で財源にも限りがあるのも事実です。現地のニーズを把握するとともに、見える支援にとどまらず心の支援もしていく、そして、CSAの目的にも謳われているよう彼らの自立促進を後押ししていくことも必要であると感じました。

感想文からも分かるよう、メンバーもラオスを大いに気に入り、たくさんの気づきがあったように思います。そして、なにより嬉しいのはメンバーがCSAの活動を正しく理解をし、この活動が現地でどれだけ役に立っているかを職場内で広報していくと明言してくれたことです。そんなたくましいチーム・ピアラオのメンバーにエールを送り編集後記とさせていただきます。

「コプチャイライライ、レオポップカンマイ」